

風土



哲学堂にて

神蔵器

太宰忌や晴れのち曇り後に晴れ
夏に入る一つ高音に指鳴つて
はじめての蛩に会ひぬ健吉忌
庭石は大小二つ夏に入る
ばら香るのこる命はほしいまま

たかなの皮ぬぐ音をききすます

これやこの亡母の小言の涼しくて

まばたきて一・二・三・四さくらんぼ

蛇出でて二男三女とかがやかす

西園や父の形見の竹植うる

卯の花やのこる命はまばたく間

駿河台にわが青春の桜桃忌



竹間集

同人作品



白牡丹

田村すゝむ

若竹の奥に師の声師の眼
たかが俳句されど俳向や朴の花
桂郎の走り蚕豆甘からむ
その奥の竹の中なる今年竹
白牡丹いのち静かに燃やしけり
俳諧は遠し全し白牡丹
函館の城は星型歳三忌

いわき再訪

塩田 杉郎

須賀川の坂に翁も搔きし汗
あぶくまライン谷若葉山若葉
卯波寄すトーチカに似て新舞子
夏料理の箸を置かせし震度3
花の名をいくつも覚えいわき首夏
佳き人の集ふ佳き家クレマチス
花言葉深くうべなひクレマチス

麦 秋

田中佐知子

聖五月薔薇園にある募金箱
巡り終へアンネの薔薇に戻り来る
愛鳥 日家の形の巣箱かな
振り向けば玫瑰は香を放ちけり
肺にまで届く海桐の香りかな
蜘蛛の囀の全し嬰の熟寝かな
麦秋の夢見心地や観世音

滝一本

工藤ミネ子

身を焦がす想ひもありや雪つばき
荒搔きや若さ溢れて水走る
風足の触れたる蕨手折りけり
ぼうたんの白は農婦の被りもの
老鶯のダムを挟みて応へけり
藤の香や除幕の句碑に雪の文字
轟音を吹雪の色に滝一本

豆の飯

柴田久子

岩清水飲みて延命信じをり
初夏の千切れ雲浮く千枚田
雨やまぬままに白鷺立ちつくす
昏れぎはの山大きかり豆の飯
時刻表残る廃駅夕薄暑
朝刊の一面に海夏来る
時の日や体内時計狂ひ出す

青葉潮

中村洋子

かたつむり三分計の砂時計
一歳と一本指の夏帽子
石庭に展示の案内薄暑かな
勅使門閉ざされてをり花ざくろ
薬師寺より唐招提寺薄暑かな
初夏のみなどみらいに巨船着く
海底に山河のありぬ青葉潮

藤の花

橋添やよひ

洛中を一川奔る五月かな
湯冷ましの間合ひの黙や新茶汲む
納骨日近し八十八夜寒
こもりくの初瀬丈六桐の花
新緑将軍塚の香の噴きあがる大舞台
飛び石は女の歩幅梅雨入り前
天平のいろに揺れをり藤の花

礼文敦盛草

林 いづみ

日本海に泛く残雪の利尻富士
黒百台や巖下に海の透きとほり
お花畑身幅に足りぬ径長く
蝦夷萱草千島風露の揺れやまず
露涼し礼文敦盛草の母衣
椴松は風衝木に駒鳥啼けり
磯舟の桶は小さし箱眼鏡
白南風や島の雲丹漁解禁日
礼文島の土に汚れし登山靴
オホーツクの潮の香残る髪洗ふ

山河集

同人作品



神蔵
器選

峡深く道切れ込んで五月来る
生田 作

葉桜や塩の利きたる白むすび
幼な子のシャツの横文字夏兆す
組まれゆく空の鉄骨田水張る
だしぬけに竹のよろこぶ大南風

白牡丹眉根豊かに多聞天
生田恵美子

筍の攻め寄る数にたぢろぎぎぬ
忘らるる村の半鐘麦の秋
右向けば右の頬打つ青嵐
鍵閉ざす消防機庫に燕の子

葛餅や大師の茶屋の小座布団
小林 和子

一本の桜が匿す機織の家
茄子の苗三本植えて幣の神

墓一基月光満ちる諸葛菜
父の日の暮れて父亡き月日かな

称名寺 五句

薰風や見上ぐ本堂三つ鱗
安永 圭子

延々と談義最中や牛蛙
太鼓橋亀鳴くを待つ良き日かな
御開帳鉦彫日向薬師像
能見台駅に届きし夏帽子

時の日の永代橋の真中かな
井口ふみ緒

M R I 定期検査や麦の秋
薄暑かな鎌倉に訪ふ寺二つ
衣更へてビル七階の鳩居堂
大棧橋五月の風をほしいまま

◇特別作品◇(抄)

夏 雲

竹生田勝次

夏雲のビル吊り上ぐる大手町
ビルの壁に時計はりつく薄暑かな
噴水や木蔭に憩ふ競輪車
白百合の将門塚に供へらる
風青し将門塚の石塔婆
夏帯や将門塚に詣でをり
反時計回りに走る夏柳
交番に天道虫や皇居前
いづくにも大石垣や青嵐
泰山木花上に富士見櫓かな

風土集



神蔵器選

山を撮る初夏の空広く容れ
津山 生田 作

糸杉はゴッホの焰聖五月

早苗田にさざ波たて昼のバス

甕の水揺れて目高に陽の届き

麓まで見通す茅花流しかな

夏燕村に帰農の家二軒

干し物に風よく抜ける端午の日

悔りし寸のたけのこ空にあり

滝落ちて岩打つ容赦なかりけり

緑蔭に日傘広げしまま憩ふ

京に住み簾もすでに十余年

葉桜や去來の墓に遺髪埋め

かもがはに子も流るる花あふち

割れ易き爪愛ほしむ梅雨の入り

京都

杉本葉子

湯田温泉遺跡野原

仕舞湯になりて白狐と夏の月

麦秋の午後の私時間かな

金雀枝や坂の途中に献血車

ふるさとに向かふ車窓に五月富士

楽器屋にチェロ借りに行く麦の秋

柏餅子の書く文字の我に似て

山号は出水山や額の花

あぢさゐ咲く早めて母兄はなの忌を修す

卯の花や棚田の奥の不動堂

谷戸道の白花ほたる袋かな

さびしさに見上げてゐたる夏の雲

初夏の長谷大仏に逢ひにゆく

時鳥独り林道引き返す

衣更ふ妻を眩しく眺めをり

神奈川

石井秀一

横須賀

平田紀美子

東京

中嶋陽子

静かなるデモの行列街薄暑
離れてはまた寄る影や夏つばめ
藤棚のうちを零るる光かな

川崎

中根 美保

芍薬に蕊のあふるる日和かな
張られたる田水に波のあらたなり
風立てて回る水車や夏兆す
葉桜や鎧の内の闇深き

東京

奥田 茶々

田水張る越中瓦の黒光り
しなざかる越の万葉雉子啼く
母の日の句座の万葉歴史館
かたつむり義経岩に雨宿り
ツッピーツッピー起床促す四十雀

横浜

安永 圭子

小満や鏡へ含み笑ひして
キツチンに空き巣守る音貝風鈴
びつしりとゴッホの点描麦の秋
注目の蝶の大名せせりかな
日傘してひとりの世界もちあるく

東京

川田 好子

芝居はね人形町の夕薄暑
止まり木に知らぬ同士の太宰の忌
曝書して時の遡上におぼれけり
鉄線花風にまはしてひとり住む

宇宙へとアンテナ立てるかたつむり

藤枝

間島あきら

若夏といふや一山漲れる
仏頭の額に一文字春惜しむ
朴の花天の碧さに応へして
チューリップ残りし茎の天を突く

横浜

下山田美江

時の日や未完におはす薬師仏
一穂のタクトに茅花流しかな
薄暑かなアウトレットに帽二つ

一水の走る涼しさ竹筧

翡翠や浄土曼陀羅称名寺

窯出しの壺こゑあぐる若葉寒

川崎

水井千鶴子

父と弟忌日重なる五月来ぬ

房総は真砂女の海よ卯波立つ

新緑の中来て帰るふたりかな

時の日や父の遺せし腕時計

日傘して墓前に訪ふや七回忌

川崎

井口ふみ緒

一直に母の手甲へ天道虫
柿の花四角に流る屋敷川

苗を買ふ八十八夜の風の中

時の日の夕暮れ渡る鐘一つ

寺若葉駒をかたどる棋士の墓

川崎

直井たつろ

地に還る黒門口の桜しべ